Journal of Indian and Buddhist Studies
(Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)
Vol. XXXIX No. 2. March 1991

Hand Exempl.

Aśvín- と *Nā́satya-*

後 藤 敏 文

Vortrag gehalten 23. 6. 1990 Sendai
8. 7. 1990 Morioka

Manuskript abgeschickt 25. 8. 1990
(2 Verbesserungen 30. 8.)

1. Korrektur 25. 11. 1990 – 26. 11.
2. Korrektur 1. 2. – 3. 2. 1991

Veröffentlichung 4. 1991
Sonderdrucke erhalten 13. 5. 1991

→ Gabriele Zeller, Die vedischen Zwillingsgötter. Untersuchungen zur Genese ihres Kultes. (Freiburger Beitr. z. Indol. 24) Wiesbaden 1990
: noch nicht zugänglich

印度學佛教學研究第39卷第2號　平成3年3月

Aśvín- と *Nā́satya-*

後　藤　敏　文

1. Aśvin 双神には Indra, Agni, Soma に次いで多い，50以上の Ṛgveda 讃歌が捧げられ，言及は400回以上に及ぶ。殆ど常に一組で扱われ，主格形では *aśvínā*, °*au* または *nā́satyā*, °*au*（韻律上，多く *nā́satiya-*[1]）と呼ばれる。*aśvín-* の名は，これまでのところ，インド・アーリャ語段階以前に遡らないが，*nā́satya-* に当たるものは Mitanni-Arya の資料に現れ[2]，Avesta にも登場する[3]ので，Nがより古い，本来の名であると推定する者も多い。双神の起源が何か，については Yāska 以来今日の研究者に至るまで諸説がある[4]：インドにいた救済聖者（GELDNER Ved. St.），明けと宵の明星（OLDENBERG, GÜNTERT 他），双子座（WEBER），雨神，太陽と月（MILLER, LUDWIG），薄明（GOLDSTÜCKER, HOPKINS），地上の王など。この中，両明星から出発する説が（HILLEBRANDT Ved. Myth.² I 60ff., Kl. Schr. 266ff. にも拘らず）一般に可能性の高い候補と考えられていると言えよう。OLDENBERG Rel. d. Veda² (1917) 207–215 はこの見解を明瞭に打出し，MANNHARDT の研究等を基に，「天の二人の息子」*divó nápātā* たる双神と，ギリシャの「天の息子たち」*Διὸς κοῦροι* 及び Latvia 民謡の「神の息子たち」*deeva dēli* の間の，神話内容の類似・照応に注目する。本来の明けと宵の両明星の中，前者だけが重視されて後者を吸収し，専ら一組として扱れるに至ったと推定し，経移の背景に，インド祭式文化における朝の重要性と夕の非重要性とを想定する[5]。GÜNTERT Der arische Weltkönig und Heiland (1923) 253–277 はこの見解を一層詳しく述べ，北欧の図象資料を援用して，祖語段階での天の二人の息子（＝両明星）の信仰を明らかにしようとした。

2. 本稿も双神の背後に両明星の存在を想定する。現実には同時に現れる事のない金星の二つの姿が，Ṛgveda に個々に言及されないか，その痕跡か余韻が発見できないか（それによって逆に明星説に信憑性が加えられないか），という問は自然であるが，そうした要素はこれまで発見されておらず，この視点からの研究はない。事実，出生の別を言う箇所（従って双子に非ず）[6]を例外として，双神は常に不可分である。もし，その神話の内容・要素に二通りの系列でも発見されれば，その各々が，本来，個々の神についての個々の神話であったと推測できる，これが

本稿の作業仮説である。そこで，双神の移動方法の記述を見ると[7] 1．天を通る，2．海を横切る；1．日中，2．夜（一夜全体）；1．戦車，2．船；1．馬等に牽かれる，2．鳥の類に牽かれる，の各二グループに纏められる。整理して組合せると1．日中，天を通って戦車に乗り，馬等に牽かれて進む，2．夜，海上を船に乗って，鳥の類に導かれて移動する，の二系統が回収される。

3．この観点から双神讃歌を解釈すべく，I 46を抄訳する[8]：1．ここに真新しいUṣas（曙）は輝き出る，天の愛しい〔娘〕は。〔ここに〕おまたちを，Aよ，高く称える。…3．おまえたちの，卓越した（こぶのある？）〔獣？〕たちは波うって進んで行く[9]，ぼろぼろに砕けた表層（波立つ海原または河面）の上を，おまえたちの戦車が鳥たちとともに飛んでいくべき為[10]。…6．我々を，Aよ，暗闇を越えて向う岸に渡すべき輝きに満ちた〔滋養〕，そうした滋養（＝曙）を我々に授けよ。7．我々の思考の船にのって馳せ来たれ，向う岸に歩み行く為に（*gántave*）。繋げ，Aよ，戦車を。8．おまえたちの櫂は天より幅広い。もろもろの大河（の合流する）渡し場には戦車がある。思慮とともに Soma の滴りは〔戦車に〕繋れてある。…11．他方，天則（真理）の道は，向う岸へ行く為（*étave*），〔今まさに aktuell. Aor..〕正しくなった（整った）。天の軌道ははっきり見分けられるようになった（ingr. Aor.）。…14．おまえたちの大地をあまねく巡る栄華に従って，Uṣas は添い動く。もろもろの夜明前の闇を通して，おまえたちは天則（真理）というもの（kollekt. Pl.）を好む[11]。

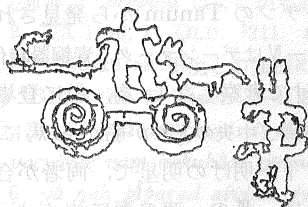
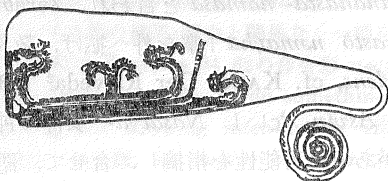
4．舞台は明け方（1，6，14），夜，船で海を渡り（3），岸（東の涯）に到達した双神が，ここで戦車を繋いで乗換え（7，8），向う岸（西の涯）へ向って天翔る旅に出発する（7，11），という神話が背後にあり[12]，それが祭式の文脈中で詩人の解釈による加工を経て（船を祭官らの思考に，戦車は祭式に，その御者を思慮，Soma の液を牽獣に同一化する）歌われている，と考える時，讃歌は整合的に解釈される。その際，夜，海を渡って来た Aśvin が本来宵の明星であり，昼，これから天を駆けるのが明けの明星であったと仮定することは自然である。しかし，両者とも日没（前）後，日昇前（後）に姿を現すだけで全天を巡らない。想像されるのは，両明星が太陽を導くと考えられていた可能性である（本来は太陽が乗換える）。宵の明星について言えば，日没後の太陽を船に載せ，夜の海を東の岸辺まで無事送り届ける先導の役割をする神話の存在が仮定される。I 112, 13 *yā́bhiḥ sū́ryam pariyātháḥ parāváti* はこのことを示唆するかも知れない：「それらを伴っておまえたちが太陽の回りを最涯において巡り駆る（GELDN.「追越す」）ところの

〔援助〕」。日没後に現れた宵の明星が沈んだ太陽の前に回り，先導する神話の存在が背景に想定される。その際に太陽を船に収容して救出すると考える時，双神にも Dioskuroi にも特徴的な海難救助の神としての性格がうまく説明される。この主題に関し，v. Schroeder WZKM 9 131f. の指摘（ここでも Latvia の民謡が示唆される）は重要である（但し，祖語段階の人が直接海を知っていたと仮定する必要は無い）。

5．明けの明星は曙 *uṣás*- と太陽とに先立って姿を現し，昼の太陽の先導を務める。太陽は周知の如く一頭の馬に牽かれた戦車に乗って天を駆ける。その馬を導くとしたら *aśvín*-「馬によって特徴づけられる者，（職業的に）馬をもつ者」（伯楽・馬喰）の epitheton はこの明星にふさわしい。*aśvínā*, °*au* は「明けの明星たち二人」，即ち，「明けの明星と宵の明星と」という意味の elliptischer Dual と解される。すると，宵の明星が本来 *nā́satya*- と呼ばれたのではという問が浮かぶ。*nā́satyā*, °*au* は「宵の明星たち二人」つまり「宵の明星と明けの明星と」である。この推量は語源解釈から支持される。

6．*nā́satya*- は **nasati*- の Vr̥ddhi-Bildung と解し得るが[13)]，印欧語根 **nes*「（困難を乗越えて）無事，家に帰り着く」に遡る，この語根については Gotō I. Präs. 200f. を見よ：ai. *nása-te*「（家に）集う，団欒する」，*s*$_{(u)}$*vastí*-「安寧」<**$h_1$su-n̥s-tí*-「良き無事の帰還・帰宅」，gr. *νέομαι*「帰還・帰宅する」，got. *ga-nisan*「助かる」。**nasati*-[14)]に「無事の帰還・帰宅」，*nā́satya*- に「無事の帰還・帰宅を司る」の意味が想定される。日没後の太陽を無事に導き，帰還させる宵の明星の epitheton にふさわしい。*ásta*-（＝jav. *asta*-）「家，すみか，故郷」は同語根の Verbaladjektiv（所謂完了受身分詞）**n̥s-tó*- からアクセント移動によって作られたものだが，*ástam eti* という熟語で，太陽の「家に帰る」＝「沈む」意味に用いられることは興味深い（用例はAV以降）。Sapphō の有名な夕星の歌も考え合せられるであろう：「夕星よ，おまえは輝く曙が撒き散らしたすべてのものを，連れ戻す。羊たちを戻す。山羊たちを戻す。母から子を戻す」。

7．双神の手柄の一つ，*Bhujyú*- を海から救う物語が，インド・イラン共通時代の海難救助の神話に遡ることを Oettinger IIJ 31 299–300 が明かにした。大地の涯の海／西の涯の河から *Bhujyú*-／*Pauruua*-を救助し，暁に，無事家 *ásta*- に送り届けるこの神話中にも，夜の太陽を救い導く宵の明星の神話から出たと思われる諸構成要素が発見されるが，詳細を省略し結論のみ指摘する。

8．IV 3,6 *párijmane nā́satyāya kṣé* は双神の名が単数で出る唯一の箇所で

Güntert aa0 272—275 を基に描く

ある。韻律上の欠損を HOFFMANN bei SCHINDLER Diss. 15 は *nā́sat$_i$yāya yakṣé* と回復し，“damit der herumfahrende Nāsatya erscheint”（Inf.）と訳す。前後の文脈「Agni よ，おまえは何と言いたいのか」*kád.. agne...brávas* はむしろ，「大地を巡るNに，おそるべき奇観に…」という解釈を示唆する（[was willst du, Agni, sagen] zum erdumfahrenden N, zur Wundererscheinung)。ここに，双神一体となる前のN＝宵の明星の神話の残響が見られるかも知れぬ。その際，*yakṣá*- ‘Wundererscheinung, Monstrum, Ungeheuerlichkeit’「恐るべき奇観」は単に宵の明星ではなく，これと不可分な日没後の太陽を指す可能性がある。即ちそれは *vápuṣ*-「奇観・偉観」と呼ばれている：VII 88, 2 *s$_u$vàr yád áśmann adhipā́ u ándho ’$_a$bhí mā vápur dṛśáye ninīyāt*「太陽光が岩の中にあるなら，首長（＝Varuṇa）は，それでも暗闇に向って，奇観を見る為に，私をどうしても連れていってほしい」(Wenn das Sonnenlicht im Felsen ist, möge aber der Oberherr mich zur Finsternis hinführen, um das Wundergestalt zu sehen)。[15]

9．本来，二つの明星の別の神話があり，両者が合体して，太陽の船から車への乗換えとこれを導く双神を主題とした夜明け前の神話が早くから生じていたと想像される。R̥V では太陽はもはや表面には出ないが，まさしくこの情景を絵にし

たと思われる「先史時代」の岩絵が南スウェーデンの Tanum から発見されている（図Ⅰ)。GÜNTERT はこれら一連の図象（Ⅱ—Ⅳはデーンマーク，青銅器時代後期の剃刀）をも転載して説明するが，両明星を分けて考察しない為，単に登場事物の列挙を出ない[16)]。我々の解釈では，図Ⅰは太陽（中央の人）が船から馬に乗移るところ（明け方)。右下の二者の中，上が宵，下が明けの明星で，両者が合成されて役割交替を示す。上が宵の明星であることは，Ⅲの，夜の海に沈んだ（そして破裂・拡散した？）太陽光線を載せて運ぶ船を先導する鳥[17)]も倒立して描かれていることに支持される。因みに，図Ⅱの天の息子たちが示す姿勢こそ，R̥V に *uttānáhasta- námasā* と言われ，Zaraθuštra が Ahura Mazdā に祈る時の *ustānazastō nəmaŋhā*「掌を外へ拡げ，敬礼をもって」（*χεῖρας ἀνασχών*, *palmas tendens*, cf. KAEGI Der Rigveda² 183[173)]）に当たるであろう[18)]。

10. *Aśvín-* ないし *Nā́satya-* 双神の神話の中核に明けと宵の両明星をめぐる神話があった可能性を指摘し，合せて，語源解釈をも示した。この観点から，他の神話構成要素の位置付けも検討してみる必要があろう。

1） 66／99回。*naasatya-*（GRASSM., 一部 ARNOLD, SEEBOLD）も可能だが不要。OLD. Noten zu I 20, 3 もおそらく *nā́satᵢya-* に傾く。Av. 形（注3）は °*ti̯a-* を示す。

2） M＝ヒッタイト契約文書中の *Mitrá-*, *Váruṇa-*, *Índra-* に当る神名に続く *na-ša-at-ti-i̯a*-an-na。前二者はインド・イラン段階の新しい神々 *Asura-* たち（*Ādityá*-神群：社会制度の神格化）の代表。*ásura-* は *Váruṇa-*（王権の神格化）の epitheton, *ásurās* ［*ādityā́s*］は ellipt. Pl. で，以下 *Mitrá-*, *Aryamán-*, *Bhága-*, *Áṁśa-* 等の総称であったろう；cf. heth. *hassu-*「王」, av. *ahu-*「主，首長」。Indra と双神が旧来の *devá-* ＝ *daēuuā̆-*「天に属する者」（*dyáu-*「天」の Vr̥ddhi-派生）を代表する事は R̥V の讃歌数（具体名 Agni, Soma を除けば1・2位）が裏付る。

3） *Vīdēvdād* 10, 9；19, 43 *nā̊ŋhaⁱθiia-*（Akk. Sg. °*θim*, °*əm*)；悪しき神 *daēuua-* として *iṇdra-*, *saᵘruua-*（～*śarvá-*, Rudra の別称，AV＋）と並ぶ。

4） Cf. 諸概説書；更に GONDA Dual Deities 48 ff., HAUDRY BEI 5 (1987) 172f.。

5） Cf. V 77, 2。新月→満月の満ち行く前半月，昼の長くなる前半年を吉祥とし，その対を好まぬ世界観とも関連か。夜・闇（cf. ŚB XI 1, 6, 8–11），眠り（JB I 98）は悪とされた。

6） I 181, 4 *ihéha jātā́ sám avāvaśītām arepásā tanᵤvà nā́mabhiḥ sváiḥ / jiṣṇúr vām anyáḥ súmakhasya sūrír divó anyáḥ subhágaḥ putrá ūhe*「こちらとこちら（別々）に生れ，同時に声をあげた（akt.!)。汚着のない体をもち，自らの〔様々な〕名を伴い。おまえたちの中一方は勝利ある（地上の？）庇護者で，Sの，一方は天の幸運な子と称えられている」；V 33, 4 *nā́nā jātā́v arepásā*「別々に生れ汚着なき

〔両神〕」(*arepásā* はここから前者に Instr. Sg. に改変・採用か)。Cf. Yāska XII 2, TĀ I 10, 2; OLD. [2]211, GÜNT. 258f., HILL.[2] I 66; GELDN. Ved. u. Br. 23; Dioskuren 出生との類似につきGÜNT. 261, 263。 MBhār. の双神名は二次的。

7) GELDNER 訳 Index 38-41参照。

8) 1. *eṣó uṣā́ ápūrviyā viy ùchati priyā́ diváḥ/ stuṣé vām aśvinā bṛhát// 3. vacyánte vāṃ kakuhā́so jūrṇā́yām ádhi viṣṭápi / yád vāṃ rátho víbhiṣ pátāt// 6. yā́ naḥ pī́parad aśvinā jyótiṣmatī támas tiráḥ / tā́m asmé rāsāthām íṣam// 7. ā́ no nāvā́ matīnā́ṃ yātám pārā́ya gántave / yuñjā́thām aśvinā rátham// 8. arítraṃ vāṃ divás pṛthú tīrthé síndhūnā̃m ráthaḥ / dhiyā́ yuyujra índavaḥ// 11. ábhūd u pārám étave pánthā ṛtásya sādhuyā́ / ádarśi ví srutír diváḥ// 14. yuvór uṣā́ ánu śríyam párijmanor upā́carat/ ṛtā́ vanatho aktúbhiḥ//*

9) *vacyá-te* cf. GOTŌ I. Präs. 280。fientiv（主語の意図・努力と関係なく一種自動的に起る行為・現象）との判断に対する JAMISON Kratylos 34 62の命令形 *vacyásva* に基いた非難 Can one o r d e r (Js Sperrung) someone to do something that is by nature automatic, neither requiring nor allowing intention or efforts? は Iptv. の機能次元の問題を混同した錯誤・無見識。*sei ruhig, be quiet,* 花よ咲け，緑は萌えよ，成長せよ，陽は微笑め，と言えなかったらさぞ不自由であろう。

10) *yád... pátāt* は Finalsatz mit Konj. (so daß... dahinfliegen soll)。HETTRICH Hypotaxe 352 は generell. Konj. の条件節（GELDN. "wenn..."）として収録。

11) *vana-* cf. GOTŌ 284。

12) Cf. IV 43, 5 *urú vāṃ ráthaḥ pári nakṣati dyā́m ā́ yát samudrā́d abhí vártate vām*「遠く，おまえたちの戦車は天にめぐり至る。海から〔来て〕おまえたちの為に回転して行く時」; *sindhu-vāhasā* V 75, 2, *ap-túr-* I 118, 4; VIII 26, 18。

13) Cf. GÜNT. 259 (: **nes* の意味を「救助に駆けつける」とし，*N*を「二人の救済者」)。諸説 cf. MAYRH. s.v.; MICHALSKI RO 24 19ff., THIEME Fs. Risch 173[25], (両者 LOMMEL「鼻腔から生れた者」に従う), HOLLIFIELD Sprache 26 176。

14) *-ati-:* GÜNT. のあげる *vasatí-*, *aṁhatí-* の他，AiG II-2 628, 642 の例参照。

15) 欠損は haplologisch な脱落 °*yāyaya*°>°*yāya*° に止らず，単数を不自然と感じて Du. (Nom. になるが) により *nā́satyā yakṣé* としたことが始めかも知れない。

16) GÜNT. はⅢのマストの光を St. Elmo の火に当てながら，船が夜の海を行くという考えに至らない。あくまで昼の天を走る船を考え，馬との関係は考慮されない。太陽と明星そのものに馬の姿をした神を想定していたかと推察される。

17) GÜNT. は Aśvin を牽く *haṁsá-* たちを示唆，倒立には触れない。

18) 本来手に武器のない印か。Cf. HOFFMANN bei MAYRHOFER Ⅲ 743, GOTŌ 196。

〈キーワード〉 Aśvin, Nāsatya, Ṛgveda, 神話，語源，金星

（岩手大学助教授．Dr.phil.）

1) Rasā ("de(r) Ringstrom um die Erde, de(r) 'Horizont'-Ozean, der die Erde von Himmel und Unterwelt trennt" KRICK WZKS 16 p.35)

Raṅhā P 32 ("de(r) die Welt im Westen begrenzende Strom" OETTINGER MJ 31 p.300)

2) Aśvins kommen morgens und abends VII 22,14
X 39,1
X 40,4

上(3) [illegible] 54 18

3) osadhi-tārakā DN II p.111 8,25
vgl. SN I 65 } (245) (ad 79)
Jtiv 20,14

KS VIII 3: 88,9 = KpS VII 1:

agnir vai prāṅ udetuṃ nākāmayata. tam aśvenodvahan.
yat pūrvam udavahaṃs, tat pūrvavāhaḥ pūrvavāṭtvam.

"Agni hatte kein Verlangen danach, (als Sonne) im Osten aufzugehen (bzw. aus dem Mutterleib zur Geburt herauszukommen). Ihn führten sie (die Götter) mit einem Roß heraus. Weil sie ihn als Vorderen (pūrvam, bzw. hier adverbiell: nach vorne) ~~herausführten~~, darum heißt [das Roß] pūrvavāh." KRICK 383